

第4話：ペットの日常、拓海の焦り

拓海はれいな様からのペット認定の言葉に安堵し、気絶するようになりについていた。

数日後、大学の講義中に拓海のスマホが鳴る。
れいな様から。

「うちに集合～♡」

というメッセージ。

拓海は講義を抜け出し、心臓を高鳴らせてマンションへ急ぐ。

れいな様の呼び出しはいつも急で、予定など気にしない。

しかし、拓海に拒否という選択肢はない。

——あの暴力と巨根の記憶が、体に刻まれている。

マンションに着き、ドアを開けると、れいなはリビングのソファでくつろいでいた。

長い脚を伸ばし、これまで見たこともないようなイケメンたちにマッサージをさせていた。



「あ、きたきた♡こっち来て♡」

拓海はひざまずき、

「れいな様……お呼びいただきありがとうございます……」

と頭を下げる。

れいな様は明るく笑い、

「先輩、みんなのこと紹介するね。翔太くん、佐藤くん、亮太くん——私のペットたち♡ みんな、先輩のことよろしくね」

ペットたちは拓海に軽く頭を下げ、

「よろしくお願いします」

と丁寧に。

拓海の目の前には3人の超イケメン——モデル級の顔立ちで、理想的な体型の男たち。

翔太は細マッチョの爽やかイケメン、佐藤は長身のクール系、亮太は可愛らしい王子様顔——拓海は自分の顔には自信があったが、先輩ペット3人に圧倒される。

こんな超イケメンたちが、れいな様のペット……れいな様は俺の
とどう思って……。

れいな様は足を投げ出し、

「みんな、続けて～♡先輩はそこで見ててね♡」

ペットたちはすぐに動き出す。

翔太がれいな様の女性器周りに顔を寄せ、佐藤と亮太は上半身を愛
撫していく。

調教されたテクニックは他の女性ならあっという間に落とせるほど
洗練されたものだった。三人の手や舌が連携し、れいな様の体を完
璧に奉仕していく。

れいな様は特に感じた素振りを見せず、平坦な声で

「ん、いいよー。翔太くんもっと奥まで。」

と指示するだけ。

ペットたちは必死に舌を動かし、奉仕を続ける。

その光景をただただ傍観するだけの拓海は燃え上がる嫉妬以上に焦りを感じていた。

顔もテクも何もかもこの中で底辺だ……このままじゃ……

1時間以上の奉仕が続き、れいな様は満足げな表情で、イケメン達に一人ずつ濃厚なキスをし、頭を撫でる。

「みんな頑張ったね～♡ご褒美あげよっか♡」

そう言うとなれいな様は手や足で次々にイケメン達を搾り取っていく。顔やテクだけでなく、全員が拓海よりも大きく、一般的には巨根と呼ばれるほどのサイズだが、れいな様の大きな手足の影響で、存在感は霞んで見える。

一通り絞り尽くし、ペットたちの精子が薄く、あまりでなくなってきたころ、

「なんかれいなもむらむらしてきちゃった〜♡」

